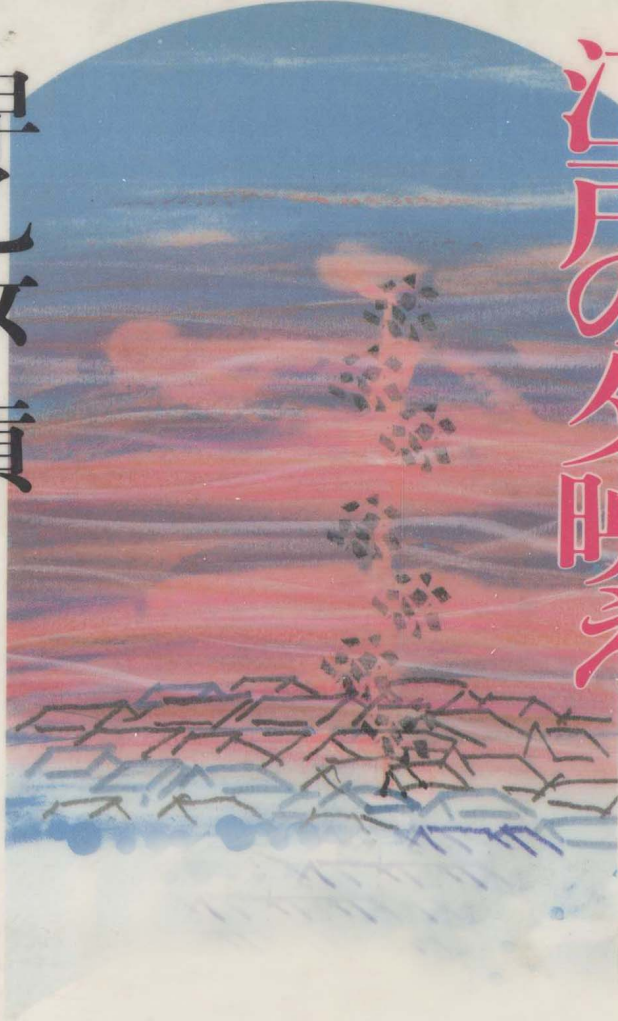


江戸の夕映え

早乙女貢



えど ゆうば
江戸の夕映え

きおとめ みつや
早乙女 貢

© Mitsugu Saotome 1997

1997年9月15日第1刷発行

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-3626

製作部 (03) 5395-3615

Printed in Japan



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義

製版——信毎書籍印刷株式会社

印刷——信毎書籍印刷株式会社

製本——株式会社国宝社

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料は小社負担にてお取替えます。なお、この本の内容
についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いい
たします。(庫)

ISBN4-06-263608-5

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。



早乙女 音

目 次

夜逃げ將軍	9
火消しの辰 たつ	30
寄場 よせば の火事	52
彰義隊	74
江戸最後の日	118
残党狩り	143
江戸の稲妻	165
艦隊脱走	199

ガットリング砲

血風清水港

次郎長の謎

兇状旅

血祭り

黒駒の勝蔵

会津の小鉄

愚庵という男

480 448 401 381 336 293 262 229

年譜	解説	江戸の残照	長崎の女	吉原通い	次郎長の子
675	667	639	614	563	522

清原康正

江戸の夕映え

夜逃げ將軍

慶応四年正月六日の夜である。

大坂城の本丸御殿で、前將軍慶喜は夜食を摂っていた。

いわゆる鳥羽伏見の戦いで徳川軍は大敗し大坂城内外は敗残の將士であふれていた。えんと焚かれた篝火の明りが不夜城のように夜空に壮麗な天守閣を浮き上らせていた。

負傷者も多く、その介護や給食などで、いつまでもざわめきが絶えない。

慶喜は朝から、殆ど食事はすまなかった。

蒼ざめた顔に臉をひくひくさせて、落着きなく、部屋の中を檻の中の熊のように歩き廻っていた。次から次と情勢を報告に来るのを聞いていても、上の空だった。

その報告も、薩長勢の南下のすさまじさと、旗本たちのだらしない敗軍の状を伝えるものだった。食事など咽喉を通るものではなかった。「おからだに障ります。何とぞ、少しでもお召し上り下さりませ」

側近の坊主が奨めるのへ、

「腹など減っておらぬ」

と、うるさげに拒んでいたが、さすがに、夜に入ってから空腹を感じたのか、箸をとった。が、一つ、二つ、口に入れると、それだけで咽喉につかえ、もどしそうになった。

ばらりと箸を投げるように棄てて、かれは立ち上った。

「伊賀を呼べ」

老中の板倉伊賀守勝静かつきよは、寢所に入っていたが、突然のお召しで倉皇として参上した。

「肥後は近くにいますか」

「は？ 会津どのなら、さきほど御廊下で見かけましたが」

「呼べ」

言葉短かに言い捨てると、また、立ち上って、行ったり来たりした。凝じっとして居れないものがかれを動かしていた。

板倉老中と会津侯松平肥後守容保かたもりだけが、いまの慶喜には絶対的な信頼のおける腹心だった。

人を遠ざけて、慶喜は吐き捨てるようにいった。

「江戸へ帰る」

唐突すぎる言葉だった。

二人は耳を疑った。

「上様、それは……」

と、信じ兼ねた伊賀守の言葉を、さらに同じ言葉が遮った。

「江戸へ帰る。船を手配せよ」

二人は思わず、顔を見合わせた。

明日にも薩長勢がこの大坂城へ大砲を打ちかけて来ようというのである。万全の防備態勢をとるか、今度は逆に攻撃の出鼻を叩くか、そのいずれかの決断を迫られていたのだ。それがまるきり、思いがけない遁走の決断だった。

「内秘じゃ、今すぐ出立する。汝ら、供せ」

否やをいわせぬ嚴命だった。

將軍が夜逃げするとは、前代未聞である。その事実を聞いた者の誰もが、耳を疑った。信じられないことだった。

すでに大政奉還したことで、前將軍と呼ばれていたが、まだ実体として幕府の組織は存在していたし、万を越す軍勢——旗本や譜代の大名とその家臣などが大坂城の内外に充満していたのである。

だが、思いがけない鳥羽伏見の敗報は、前將軍慶喜に、“旗本不信”を起させてしまったのだ。

（頼むに足らぬ奴らだ）と思った。

会津藩主松平容保兄弟と老中板倉勝静ら数人を指名して、深夜の大坂城脱出の扈從こしやうをさせたのも、そのあらわれであった。

「仰せながら、將士どもは、氣が立っております。上様の御動座が知れましたならば……」

家臣と雖も、何をするかわからない、と側近は憂慮した。

世の中が乱れると、君臣の契りも非情になる。戦国の世では、敗將は家臣の手で討たれることも珍しくなかった。

「何とかいたせ」

慶喜は苛々していった。

「かような事態と相成りましては、誰を信頼してよいやら」

困惑して、いい智慧も浮ばない用人に、「彼の者に先供を命じよ」といった。

「ソレ、新門の辰五郎じゃ」

新門の辰五郎。江戸町火消十番組の頭取で、俠気をもって鳴る男だ。組下は七百三十一人だが、江戸いろは全組九千余の鳶職が、かれの一声で動いたといわれる。

このたびの將軍上洛にも、慶喜のお声がかりで配下二百人を率いて供奉していた。

表向きは火ノ元御番御用手伝いだが、火薬・銃器などの小荷駄の運搬役でもあった。また辰五郎の娘お芳が、慶喜のお側に仕えているという関係もある。

大坂城から夜逃げをするのに、こんな格好な露払いはいない。

辰五郎は控所で纏持ちの金八や小頭の甚蔵などと酒を飲んでいた。

「やつらが攻めてくるのは、明日か、明後日か、どっちにしたって、大坂は火の海になるぜ」

「へえ、そのときは、上様をお守りして、軍艦にお供しませう」

「火はどうするんでえ。火消しが消さねえのか」

「お江戸と違いますア、江戸のいろは組だ、上方の火は、どケチ鳶にまかせますア」

「いいことをいうぜ、早くお江戸に帰りてえな」

そこへ用人の黒川嘉兵衛が急ぎ足にやって来た。

「お召しじゃ、急げ」

緊張した顔が尋常でなかった。辰五郎は盃を捨てて立ち上った。

辰五郎が走りだすと、纏持ちの金八もすぐに続いた。辰五郎はすでに還暦を過ぎていたが、さすがにまだ壮者に負けない元氣さだ。慶喜が夜逃げする露払いだと聞かされると、辰五郎と配下は、かえって、ふるい立った。

「面白え、上様の邪魔をするやつがいたら、この辰五郎が、目にも物を見せてやらあ」

手鉤てなぐりと鳶口を握りしめて、辰五郎らは、慶喜が船へ乗るまでの道筋をひらいていった。そこら中に、旗本や各大名の家来たちが屯こもろしていた。宿所などには入りきれない。

天幕を張り、篝火を焚いて、石垣の蔭や御小屋の外にも、蓆むしろを敷いただけで横たわっている者が多かった。怪我人も多かったし、病人もいる。師走に狙撃されて肩に貫通銃創を受ける。近藤勇や、咯血して伏見に出陣出来なかった沖田総司なども、どこかにいたはずである。

すでに土方歳三らも敗戦に切齒しながら退却して来ていた。

傷病者の苦悶の声と、自棄やけを起した旗本たちの蛮声や酔態が城の内外を埋めている。そこを將軍が通過しようというのだ。それとわかれば、無事には通れない。

（將軍が自分たちを見捨てて、夜逃げするのか）と、阻まれるのは必定。

誰もが気が立っているのだ。

新門の辰五郎に露払いを命じたのは賢明だった。

命知らずの火消したち、たとえ、相手が侍でもひるまない。辰五郎は若いときから、町火消として、大名火消や武士たちと何度も喧嘩している。権威に対して一歩も退かない俠氣が、江戸市民から信頼と喝采を浴びているのだ。

慶喜をはじめ、松平容保や板倉伊賀守など、火事装束で頭巾をかぶり、さりげなく大坂城を忍び出た。辰五郎が先導し、側近の武士たちも相前後して、守ってゆく。

物々しい警固では、徒らに人目を引くことになるから、とにかく目立たないことが大事だった。

篝火に顔を背け、注意を引かないように荷物も殆ど持たず、一行は、漸く水門に辿りついた。

小舟が待っていて、黙々と乗り込む。慶喜や老中らが乗り込み、静かに暗い川の上を遠ざかるのを見て、ほっと、辰五郎は肩の荷がおける思いがした。

「よござんしたね、頭」と、金八が囁いた。「ああ、これで安心だ」「軍艦は富士山丸ですか」「なんでもアメリカの軍艦らしいぜ」「なるほど、そいつア趣好だ。まさか上様がアメリカ船で東下りたアお釈迦さまでも気がつくめえ」

前將軍のお役に立った、上方までお供した甲斐があった、と、安心したのだが、実は大変な忘れ物をしていた。

慶喜をはじめ側近たちも、家臣らを捨てて夜逃げをするうしろめたさと、万一の場合の不安や恐怖で、よほど狼狽^{うろばい}していたのだろう。天満^{てんまん}の八軒屋から小舟でアメリカ軍艦に移り移ると、

「これで安心じゃ」

「薩長どもも、ここまで追つては来まい」

「したが、御味方にも、このことは、出来るだけ、伏せて置かねばならぬ」「どう糊塗^{こと}しても、半日であろう、それ以上は誤魔化せまい」「上様、御不例^{ふれい}ということで、時間を稼がせることにしているのだが」病氣といえ、誰もその寝所^{ふしど}を冒^{おか}せないが、「医者^{いしや}の診立ては如何^{いか}じゃ」と、安否を氣遣う者たちが殺到すれば、とても隠しおおせない。その限度は、半日だといふのである。慶喜はアメリカの軍艦から、数刻後に、またひそかに開陽丸に乗り移った。

開陽丸は、幕府がオランダに注文して新造させた当時、東洋一の最新最大の軍艦で、かれは文字通り大船に乗った安心感で身を横たえたのだが、突然、がばとはね起きた。

「馬印^{うまじるし}は何とした？」

と、かん高い声で叫んだ。あつと、側近の者も氣がついた。顔色が変わった。

常に將軍の傍にあらねばならぬ馬印。徳川家重宝の一つである。東照神君家康が関ヶ原の